

巻頭言

世界ではじめてサツマイモの人工交配を試みたのはだれだろう

－組織のなかの研究者－

(社)農林水産技術情報協会 名誉会長 西尾 敏彦

農業技術の歴史に興味をもつようになって久しいが、最近気になっているのが、サツマイモ人工交配の事はじめである。

どの書物にも出ていることだが、わが国のサツマイモ人工交配は大正3年(1914)、当時沖縄県にあった糖業試験場國頭苗圃(國頭郡羽地村、現・名護市)ではじまった。小林仁氏の『サツマイモのきた道』(古今書院、1984)によると、これが世界初のサツマイモの人工交配でもあるという。坂井健吉氏も『さつまいも』(法政大学出版、1999)のなかでこれに触れ、「イネとは全く異なる開花結実性をもつサツマイモで、人工交配による品種改良を試みた、当時の沖縄県糖業試験場の専門家(氏名不詳)たちの発想は、まことに素晴らしいものであった」と絶賛している。

ところがである。この世界に先駆けた歴史的大研究が、どんな経緯でどんな人びとの手でなされたか、皆目わかっていない。なんとしたことだろう。

ご存知のとおり、こと人工交配育種に関する限り、わが国の取り組みは早かった。メンデル遺伝法則再発見から4年後の明治37年(1904)には、農事試験場畿内支場で加藤茂苞らによって稲麦の人工交配がスタートする。今でこそ人工交配など常識だが、当時はピカピカの先端技術であった。全国で唯一、サツマイモの採種が可能な沖縄県の研究者がこれに興味をもったとしても不思議はない。大正3年から地元の在来12品種を用いて、34組み合わせのF1系統

を作出している。糖業試験場は間もなく農事試験場に改組されるが、業務は継承され、大正12年(1923)には「沖縄1～7号」が育成された。

沖縄県農事試験場の人工交配試験は、昭和2年(1927)の指定試験発足とともに、これに編入される。沖縄交配系統が全国配布されたのはここからで、昭和13年(1938)育成の「護国諸」以降、多くの優良品種が全国各地で育成されるようになった。今では世界の最先端をいくわが国サツマイモの品種改良は今から100年の昔、沖縄県のある試験圃で流された先人の汗にはじまることを、改めて明記しておきたい。

それにしても、ひと昔前の技術開発には研究者名不祥が多過ぎる。研究は人より組織という意識が強かったのだろうか。もちろん技術開発には多くの人の協力が必須で、それを支える組織も重要だろう。だがそのことが個人の働きを埋没させてよいということにはならない。

研究は人がするもの。最近の巨大プロジェクトも含め、卓越した技術開発にはいつも独創性・先見性豊かな研究者とリーダーの存在が付きものである。歴史は、そうした人びとの想いや活躍ぶりが次世代に伝えられることで後輩を奮起させ、つぎなる技術革新につながったことを証明している。

世界ではじめてサツマイモで人工交配を試みたのはだれだろう。じつはわたしはひそかに該当者を絞っている。まだ確証はないが、いつかは明らかにしたいものである。